

特250

287

法隆寺詣

で

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10¹⁸m 1 2 3 4 5

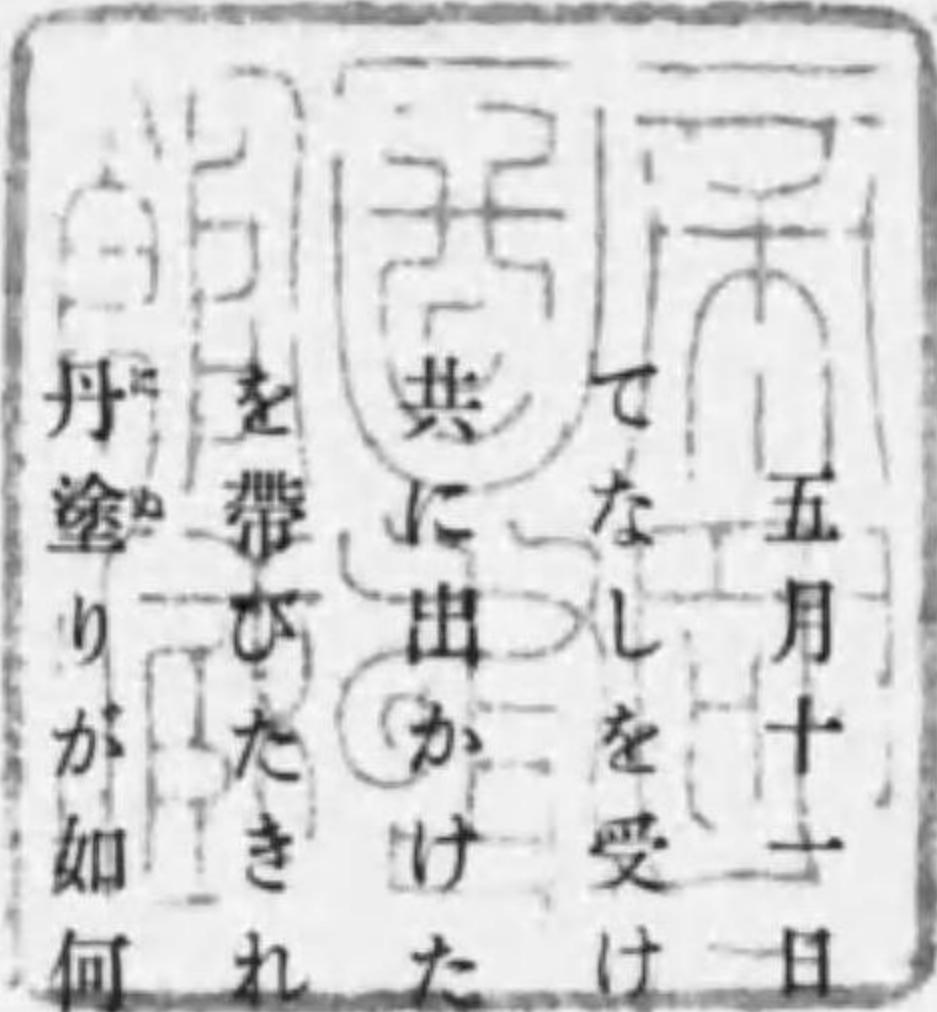
始



持 250
287

法隆寺詣で

奥田正造



五月十一日午後五時法隆寺の客殿へ通され、佐伯猊下から茶菓のおもてなしを受けてから、伽藍を拜んで「ようか」との仰に従ひ、八人の教子と共に出かけた。拜觀人の群は去つて境内は漸く静かである。やゝ白味を帯びたきれいな砂地には松のみどり濃かに、又その松に配した伽藍の丹塗りが如何にもよい配合を得て、只見るだけでも何ともいへぬよい感じがわく。石段を上り中門を通つて見渡せば、講堂・塔・金堂と三つの根本伽藍が鼎足形に配置せられてゐる。これが「字」の三點、即ち涅槃の三徳

法身と般若と解脱とを表はし、一名佛面伽藍といふのであるとの御説明を伺ひ乍ら、謹んで合掌三禮した。

朝鮮から移入せられた當時の伽藍建築の様式では、中門をはひると第一に塔がある。その後方に金堂講堂と順次一直線上にたてられてゐる。佛舍利を供養する功德で五百生天に生れるといふ信仰から、舍利をさめた塔が崇敬の第一位を占めてゐたのではあるが、法隆寺では、教理の傳習が第一義であるといふお太子様のお考が建物の上にも表はれて、講堂を正面として、塔と金堂とが前方の左右兩側に配置せられてゐる。よき教を取り入れて、國の基を固めたいといふお太子様のお理想を現前に教へて頂く様な貴い感じを抱きつつ、合掌のまま伽藍を見上げる。五重の塔は左に重層の金堂は右に、共に千三百年の昔を語つてゐる。この塔、この堂、この門が、地上最古の木造建築でもえやすかるべきこの物が、千三百

二

年の春秋を経來つたかと思へば、わが命のはかなさ短さの感じも一入であると共に、かかる木造の建築が、火にもやけず風にも破られないで傳へられた貴さの感じも亦一入に深い。

法隆寺はお太子様の御父君 用明天皇御崩御の後、その發願を果たし給はんがための御建立で、即ち金堂の御本尊、藥師如來は父 天皇に對し奉る御孝道の發露であり、又中央の釋迦如來は、御子山背大兄王が御父君聖德太子御菩提の爲めに造らせ給うた佛像であると聞いて、共に親を思ひ給ふ御孝心から出でてをることに氣がついてみると、水にも朽ちず火にもやけなかつたのも道理とうなづかれる。

入日は已に沈み、夕映の空も次第に色うすれ、門内人影たえて靜寂な月影が老松の梢にかかつて居る。

三

明日から數日に亘つてゆつくりと參拜させて頂くよろこびにあふれつつ、猥下におわかれして普門院に入り、旅のつかれを休める。客間に通れば、床にはお太子様の像がかけてある。寫してはあるが有名な阿佐太子筆の御像で、兩側に二童子をつれ給うたお姿である。これも參籠の望みを汲んでの猥下の御心づくしとありがたく、まづ禮拜して次の間でくつろぐ。去年の秋とめて頂いたのは十月二十二日の夜、太鼓祭とやらでにぎやかな晩であつた。お祭も旅の一夜のなぐさみかとお笑ひ乍らのおてあつきおもてなしをかしこみつつ、わざわざ用意しておいて下さつた薬湯に身をあたゝめてから、客殿つづきの新堂の縁に立つて、折からの満月の光をめでた。新堂といふのは、伽藍に對しての新堂で、小さい乍ら、

七百年前鎌倉期の面かげをそのままに傳へてさびある堂である。すみ切つた青空に、くつきりと浮ぶ老松の林、その松かげに立つ佛堂を拜しつゝ、更けゆく秋をかなしむ虫に催されて、なき父母の恩愛を一入になつかしく感じて、暗涙を催し、この靈境でこの歡待を受けるのも全く大聖矜哀の善巧によるとより外考へられなかつた。今夏亦參籠の願ひを立てて茲に來り、同じ様な月光に照されて同じ思ひが更に深い。庭に面した障子をあけると、聖靈院の屋根が垣根ごしに拜せられる。雲はあるが月に照らされた松の上に塔の九輪が聳えて高い。

翌くる朝は、未明に聖靈院に參つて曉の御看經に隨喜する。聖靈院は東室の南妻を作り改めて堂殿としてある。東室とは金堂・塔・講堂の根本

伽藍を圍む歩廊の外、東北西の三面にある三面僧房の中の東の僧房である。階段を昇れば禮拜の間は格子で内陣と外陣とに分かれてをる。内陣正面の中殿扉の内にはお太子様の束帯の座像がおまつりしてある。四十五歳攝政のお姿をうつし、お像のお胸の部分に胎内佛として金銅の如意輪觀世音菩薩ををさめてある。そのお顔がお太子様のお像のお顔と同じ高さで、腹部には法華維摩勝鬘の三經が納めてあるといふ。外見にはこれといふ別事はないが見えぬところにお太子様の御精神をつくりこめた古人の心持が貴い。堂内猶暗く、幽かにゆらめく燈火に照らされつつ、中に古き音律を傳へたお經の尊嚴な聲をきく時、全く現身を忘れる。「南無觀音化身上宮太子」とたたへ奉る太子様のお肉身は、千三百年の昔に淨土に還歸し給うたのではあるが、救世のために此界へ往來し給ふ法の上のお太子様は、爾來限りがない。救世の一念に終始し、三經を方便

として衆生を導き給うた太子様の御心は、お太子様の御身と共に亡びたわけではない。この御心を心とし、衆生を救はんがために身を忘れた古賢大徳はその還相に外ならない。若し人よく肉の生活を清めて染汚をはなれ、有心を絶し無爲を事として胸に秘められた妙智が自ら現はるるの力を得、時には勝鬘夫人となり、時には維摩居士となつて、なやめる衆生のために不請の友となり得たならば、これ即ち我身の再來なりと親しくお太子様が仰せ給ひつゝあるかの様に感ぜられる。

左右の兩扉の内には如意輪觀音、地藏の二菩薩、その前に山背大兄王子をはじめ、殖粟王子、乎麻呂王子及び惠慈法師の像を安置してある。法師は高麗の僧、太子様の佛典の師である。任を終へて歸鮮の後、薨去の報を聞いて大に悲しみ、僧をあつめてお太子様の御冥福をいのり、われ國を異にして生れしと雖も、恩澤を受くることあつし、今や薨じ給ふ獨り生きて

何の益もなし、明年二月その御命日に往生して淨土にてあひ奉り、共に衆生の化益をはからん」と誓うて、所期の如く示寂したと傳へられてゐる。木像を拜しつつ太子様のお徳を思ふ。

四

聖靈院の禮拜を終つてから夢殿に參る。茲は太子様の御宮殿即ち斑鳩宮の址で、法隆寺の東方約二丁、夢殿を中央にして前に禮堂あり、後に舍利殿繪殿があり、歩廊之を連ねて一廓とし、更にその後方に傳法堂がある。之に鐘樓、經藏を加へ、通稱「不明の門」といふ南大門をもあはせて東院といふ一區劃をなしてゐる。中央の夢殿は入鹿の亂に一旦燒失したのを大僧都行信の奏聞によつて、聖武天皇が勅して再建せしめ給うた八角圓堂で、屋上に露盤がある。その上に蓮花があり、瓶・八角の蓋・更に上に寶珠

火炎があつて、はるかに望む夢殿の屋根の様子が誠によい。紫衣をめし、錦の袈裟をおかけになつた猊下のとから、少し隔つて、猊下のお姿をもこの繪のやうな感じの中へ入れて見ると一入にありがたい。はき清められた箒目につくわが足跡を氣づかひつつ、西の通用門から歩廊へ入つてすぐに西の石段を昇り、左轉して北の口から堂に入る。櫺子窓からもれ入る日の光の乏しいのと、千歳の古きを物語つてゐる柱や壁の黒さから、何となく莊嚴な落ちついた氣分がただよふ。本尊ををさめ奉れる大きな厨子が、堂の中央にある八角二重の石壇の上に安置せられてあり、壇の廻りには八本の柱があつて、何れも堂と同じ様に八角柱である。八角は八葉蓮の表示で觀音薩埵の本誓に氣付かせていただくことが出来る。合掌しつつ更に右繞して南面し給へる御本尊の前に立つ。御本尊はいふ迄もなく觀世音菩薩である。猊下はおつきの人に命じて御厨子の扉

を開かしめられた。みあかしのかがやきと、たちのぼる香煙の中に尊像を拜しつつ、謹みて普門品を誦し奉る。消除三毒普門示現のお誓ひを誦し、大悲加護の力を念じつつ、温顔慈容を見上ぐる時のよろこびは筆にも言葉にもつくし難い。御許しを得て壇上にすすんで右側からお像に咫尺し、心ゆくばかり拜し奉る。このお像は、數百年の間、勅封の秘佛として百數十尺の白布にまきをさめられておいでになつた。それで鎌倉時代の記録にはそのお袖の縁のつき出た所を布の上から想像して、この御佛は太刀はかせ給ふかとかいてある。この様なことを考へつつ、今かく咫尺して拜し奉れば、うれしさは一入で申すべき言葉もない。千三百年の古、救世の一念をこめて御自分と同じ身丈けに彫らしめ給うたこの尊像の前で、幾多感得のよろこびを味ははせ給うたお太子様を偲んだ。このお像は御手に寶珠を持つておいでになる。それが寶珠と決定されたの

は最近の事で、以前は手に持たせ給ふ珠の形も何の表示か見當がつけがたく、加之その上に一筋細い切れ目があつた。それでその切れ目が何であるかについても學者の間に色々とむつかしい議論やら考證やらが持ち上がった。然るに、ある時何かの事で、お像の下から火炎が発見せられた。何の氣もなく一寸その火炎をその切れ目にはめてみたら、ピツタリと納つて正に寶珠であることがわかつたので、今までの飛んでもなくむづかしい議論やら考證やらは忽ちに解決せられてしまつたとの事である。「學説はあてにならぬ」と思った。

御本尊に向つて左には西面して太子様の御立像が安置してある。手に柄香爐を持ち、御父君の御惱平癒を祈らせ給うた御十六歳のお姿をそのまゝにうつして世に孝養の像と申し上げる。これを拜して第一に思はれる事は、かく立たせ給うた時の御心持である。子として父母の病床

に侍し、神かけて平癒をいのる至情は、おしなべて一であるとするれば、お察し申上げるに難くはない、只胸がふさがる。併し今かく千古を隔てて拜し奉れば思ひは只そればかりではない。我國の人々が廣くこのお姿を家の守りとして孝養の二字を永久に傳へる様にしたいとのねがひがわく。

五

夢殿の裏にある舍利殿と繪殿とは、一つの棟の内て左右にわかれてゐる。舍利殿には舍利を奉安してある。内陣の中央には太子様の御二歳のお姿をまつつてある。南無佛の太子と申し上げて、赤い袴をつけて立ち給ふ童子合掌の御姿である。誰がささげまつつたか、頭から幾枚かのおめしをおかぶりになつてゐる。お舍利はこのお像の後の大きい御厨

子の内に安置せられてある。狛下はおつきのお方にこの内から錦につつまれたものを持ち出ださしめられ、われわれの前に特におかれた臺の上に安置せしめられた。一同般若心經を奉讀しつつかある間に、そのひもがとかれて一重二重三重と七重七色の錦のつつみが開かれて、最後に水晶の五輪塔があらはれた。高さ七八寸、地水火風空の五大を表示した五輪の中央圓形の中がうつろになつて、その内にお舍利がをさめてある。塗香に手と口とを清めて掌上に拜受し、讃仰恭敬してその結縁をよろこばせて頂いた。お太子様は御誕生後左の手をおひらきにならなかつた。如何した事かと御母君をはじめ一同がお案じ申しておいてになると、御二歳の春二月十五日、東に向つて「南無佛」と稱へ給うておひらきになつたお手から、このお舍利が出たといふことである。灰色をした小豆大の玉である。拜し終れば、再び誦經の中に七重の錦につつませ、初めのやうに

お厨子の内におをさめになつた。七重は過去七佛を表はすとの事である。毎日正午の刻に其様にお厨子よりお出し申し上げ、修法供養すること千年の古から今も尙缺かさず行はれて居る。そして其時にはこのお舍利を奪はんとてうかがひよる龍神を攘ふために龍神に香を供するの習はせとなつてゐる。貴い事であると思つた。繪殿の中央には太子様の御七歳の座像を安置してある。學問の太子と申し上げる。殿内の壁にはお誕生から御薨去までの一代の繪物語がかいてある。傳法堂は光明皇后の御母君橘夫人の御住宅で、當時の住宅の面かけをしのぶに分である。

六

東院を一巡して再び金堂にもどる。金堂中央の御本尊は釋迦如來・藥

王菩薩・藥上菩薩で、太子御薨去の後、推古三十年に橘大郎女及びお子様がたの御發願によつて御菩提のために鑄させ給ひしもの、作者は止利佛師である。止利が祖父司馬達等からうけた信仰を以て太子様をお慕ひ申し上げつつ、心をこめて鑄奉りしお像に、自ら尊い力のおふれてゐるのは道理である。その右にはそれ以前の根本の御本尊藥師如來のお像がある。このお像は用明天皇が御惱平癒を祈らんがために發願し給うたが果さずにおかくれになつたので、御父君御菩提のために推古天皇と共にお太子様がお作らせになつたのである。像に咫尺してその製作の特徴に就いてのお話を伺ひつゝ、之をこのお堂の中央におかさげになつて落慶の式をおあげになつた時のお心持を偲んだ。聖靈院のつづきの東室の一室に、和田畫伯の筆で具體化せられてゐる「金堂落成」で、止利が御案内役をつとめてゐる圖があるが、之を思ひあはせて更にその當初のお

太子様のよろこびを察し奉つた。

四隅には四天王のお像を立ててある。顔長く唇あつい直立の姿がよそでをがむ姿とは餘程變つてゐる。猊下から四天王信仰の變遷と、その像が次第に美術品のやうになつたについての懇な御説明を伺つてよく拜してみると、なる程この方が更に尊い。先年塑造の梵天像の杳がとれたのでよく見ると、しつかりとつくり付けになつてゐて容易にはとれさうには思はれぬその杳の下には、足が正しくきざまれ、趾の爪まで明瞭であつたとのことである。佛様を相手として、よろづ信仰を以てなさるる古人の仕事には、見えぬ所にも疎略がない。これが生なき材料をしてよく千歳の命あらしめる所以であるとありがたく思ふ。

中央本尊の左脇に吉祥天のうつくしい立像がある。その前に香爐の形のやうな大きい鑄物がある。お太子様時代におあげになつたお水が

そのまゝ、今日まで傳へられてゐる壺で、毎年お正月の嘉例として寺内の僧侶一同がこの水一滴づつを頂くことになつてゐる。勿論頂けば減る道理故、減るだけその年の新年の水で補うておくのであるとお話、千三百年の古へ太子様がお手づから汲み込ませ給うたと傳へらるゝお水をそのまま、太子様と同じ様な心持で頂くこの儀式が、永い間かはらずに傳へられてゐるといふ事は何といふ珍らしくもまた尊い事であらう。只に建築が古いだけではない、お像が古いだけではない、この建築の内、このお像の前で、千古の行持が如實に傳へられつつあればこそ、われ等がこの寺に參る時、今も尙生命あらせ給ふ太子様に接することが出来るのであるまいか。

世に喧傳せられてゐる壁畫に感心し、精巧な天蓋を仰ぎつつ、かがやきし當時のうつくしさを偲び、柱のふくらみをめてつつ、金堂内の須彌壇を一周すると、東北隅に有名な玉虫の厨子が安置してある。推古天皇の御内佛の御厨子である。當時の宮殿造りの佛をそのままに傳へてゐる。金銅透彫唐草金具の下に玉虫の羽根をしきつめてある。それで玉虫の厨子といふのである。今では餘程氣をつけて見ても、話にきく以外、それかと思ふかけもない位になつてゐる。臺の周圍には密陀僧を以て畫かれた有名な佛畫がある。その兩側面の一は雪山半偈、他は餓虎投身の圖である。

雪山半偈の話は涅槃經にある。昔雪山に一人の童子があつて、無上菩提のためならばどんな苦行でもしようと發心した。帝釋天が一日その道心をためして見ようと羅刹の姿に身をかへて雪山へ下り、童子に近づ

いて清雅な聲で諸行無常是生滅法といふ半偈を唱へた。童子は病める人の良き醫にあひて好藥を得たやうに、溺れんとするものの浮木にあひ、船を得たらんやうによろこびにあふれて、誰かかかる貴い偈を唱へ給ふとみまはした。あたりには誰もゐない。只見るからに恐しい羅刹がゐた。そこで今の尊い半偈は、お前がとなへたのか、若し然らば残りの半偈をもぜひに聞かせて貰ひたいと頼んだ。羅刹答へて「いうたのは私である。併し自分はこの數日間何もたべない、今のは苦しみのあまりの囁語である」といふ童子「それなれば食物を求めてあげよう、どうか残り半分を教へて頂きたい」羅刹「いやたべるものは人の暖肉、飲むものは人の熱血でなければならぬ。世の中に澤山の人はあるが、それ相應に福德があり、諸天善神から守られてゐるので、只誰でも殺して食ふといふわけにはいかない」といふのを聞いて、童子「徒らに生きてもかひなきこの身、無上大法

のお禮にはこの身を供養しませうといふ。羅刹半偈八字のために大切な身をすてる人のあるとは信じられない。これを聞きたいといふのも命あつてのためではないか」というてうけがはない。そこで童子はいやこれ瓦器を施して七寶の器をうるやうなものである。この不堅身を捨てて法の上での金剛の身となすに何でこの身が惜しからう羅刹乃ち生滅々已寂滅爲樂の半偈を述べた。聞き終つた童子は歡喜踊躍して、わが如く道を求むる後人の爲めにと、石といはず壁といはず樹といはず、この偈を記しとどめて、さて傍の樹上によち登つた。樹神が何をなさるのかとたづねると、童子偈を教へて頂いたお禮にこの身を捨つること草木を捨つるが如くであるのを見よ」といひも果てぬに身を投げた。その時羅刹忽ち身を變じて帝釋天に還復し、童子を空中にうけとどめて地上に安んじ頂禮して、道心を試みるの方便であつたことを謝して姿をかくした

といふ話である。

又餓虎投身の話は、金光明最勝王經にある。昔印度に大車といふ國王があつた。三王子の末を薩埵王子というた。ある日三王子はつれだつて城外に遊び、思はず道を失うて大竹林中へ迷ひこみ、一匹の大きな虎が七子をつれてゐるのにあつた。母なる大虎は七子にまつはられて食を求めに出かけることが出来ない。飢渴にせまつて方に死せんとしてゐた。王子たちはあはれみの心を起されたが食を求め手だてがないので、そのままにして行き過ぎた。薩埵王子は愍念やみがたく、疾病惡念不淨のこの身を愛重して何かせむ。今餓虎にこの身を施して、無上究竟涅槃を得むと思ひ立つて、ひとり林中へもどり、身を捨てて虎に與へられた。併しこの大悲の愛に對しては、虎は爪を立てることが出来ない。これをみて王子は更にあはれみの心をまし、岩の上から身ををどらせて飛び、わ

れとわが身をきづつけつつ虎の前に落ちた。流るる血しほの香にひかれ、餓虎は血をなめ肉をかみ、終に王子を啗ひつくして只骨のみを残したといふ話である。

推古天皇が御持佛の御厨子に、何故にこの二つの話を、畫かしめ給うたのであらうか、偶然では勿論あるまい。又單に有名な話であるが故とも思へぬ。天皇は太子様からしばしば勝鬘經の講讀をお聞き遊ばされた。勝鬘夫人の所謂身命財の三つを捨てて正法を護持せんといふ大願は、御熟知あらせられた事は申すまでもない。朝な夕なこの厨子に對して御佛をがませ給ふ毎に、菩薩大悲の御願力を偲びつつ、御身をかへりみ給ふためにと、この二つの本生話を特に畫かしめ給うたものと拜察し奉る。かくして説明する人から、當初の御本尊はなくなつてゐると聞いても、つと大切なものがこの臺に残りとどまつてゐるやうに思はれる。凡そ

上に立つものは、常に下からうける崇敬になれて、自分のつつしみを忘れやすいのみか、慾念が増長して、自分の樂しみのためには、人々の勞苦を勞苦と思はず、事ふるものをわが歡樂の器となし果てて、惡魔のやうな醜い自分に氣がつかなくなる。百花咲き亂れ、甘泉自ら湧き、鳥歌ひ、このみ熟して、人生の快樂一つも缺けたるものなき雪山の様な清淨な樂土で、法を求めようと志す童子になるのは中々むづかしい。まして半偈八字のために命をも捨てよう、餓えて苦しむものあらば、愛するこの身をも與へようといふ様な菩提心をば起しにくい。かかる道念を長じ、道業をおはげみになつた心の鏡としてこの厨子をみる時、只單に美術工藝品として鑑賞するだけでは物足らぬ。かかる貴いお心持が基調をなしたればこそ、残された片影の中に今も尙いひ知らぬあこがれの的を見出すのではあるまいか。

金堂内を一巡し終つて堂外に出で、堂の正面へ來ると大きな石が一つおいてある。拜石といふのであると猥下御自身まづ腰うちかけられて、昔はここから堂を拜したものであるとお教へ下さつた。等しく茲に坐して堂をみあげつつ合掌すると、御建立の當初をしのび奉るに尤も都合がよい。參籠の間わざわざ京都から御來寺下さつて、起居を共にし乍ら四日間、古代建築の特色について、いろいろと御示教下さつた天沼先生の御親切によつて、盲の様な私の眼もひらけ、これまで只何となしにありがたいと感じてゐた特徴と美點とを詳にさせて頂いた。今拜石の上に跪坐して、金堂の全體を眺めつつ、先生にお習ひしたやうに、あの裳階を取りのけたと考へて仰ぎ上げると、すつきりと立つ重層の金堂を心に見る事

が出来るやうになつた。如何にもよい堂の姿である。堂に入つては千古にかがやく御心の光を拜し、堂を出でては古匠千歳の魂を捉へ得て、ここに參拜の喜びを全くした。

金堂と相對して五重の塔が聳えてゐる。そのてつぺん、寶珠から水炎、九輪、蓮瓣、伏鉢、露盤を拜しつつ、各層の軒並みの工合や、軒先きのそりのよき様子にみとれつつ、地上まで眼をおとす時、今迄は何の考もなく、只九輪にかかつてゐる鎌をみ出してよろこぶ位がせきの山であつたわが眼も、今は相應に注意すべき幾つかの點を見失はぬやうになれた。露盤が地平で、伏鉢が墓、九輪が傘、水炎が光明に當るので、舍利を納めるためにはそこまで十分であるが、お舍利の尊きを遠方の人人にも拜まさうとする親切から、その下に三重五重と高い建物をつくりたしたのであるといふ事も教へて頂いた。しかし乍らここに五重の塔について語らむとする

更に重要な事がある。それは山背王御最後の御物語である。

お太子様がおかくれの後、蘇我氏は自家の勢力扶殖を策せむが爲に、太子様の御遺族すべてを亡ぼし奉らんとはかつて、不意打ちに斑鳩の宮へおしよせた。山背王は一族男女の方々を引きつれて、急を後の生駒の山中におさけになつたが、夜中ひそかにこの塔下へおもどりになつて、一族と共にここで御生害になつたと傳へられてゐる。當時お太子様のお徳を追慕し、蘇我氏の横暴をいきどほつてゐた人々は、しきりに山背王に策を献じ奉つたにも拘はらず、王は遂に「身を入鹿に賜ふ」とのたまひつつ、御生害になつたのである。時勢から考へて、皇室の御安泰の上からも、餘儀ない御覺悟であつたかとお察し申上げられる。御父君から平素おうけになつてゐた「諸惡莫作衆善奉行」のお庭訓がよく徹してゐたので、この場合身を殺して仁をなす菩薩の大道をおえらびになつたのであらう。塔

の中には中心柱の四面に塑造の群像がある。南面には彌勒佛の説法、西面には舍利供養、北面には釋尊の涅槃像、東面には維摩文殊不二問答をあらはしてある。一巡して塑像の形から、その時代の人々がこんな姿であつたらうかなど考へると、山背王その日の御有様が彷彿として眼にある様な心地がした。茲を出でて塔前の拜石に坐してみあぐれば塔は青空に高い。

わが所藏の貴い物に目がさめた時、人は雑作なく自我を捨て去るを辭せない。この發心を得た時、人は當成の菩薩であり、その所現が菩薩大悲の願行である。

九

五月十四日午後、狛下のお供をして磯長の御廟に詣でた。

法隆寺驛から汽車に乗り、柏原で電車に乗りかへ、喜志で下車する。折からの驟雨の中を自動車で走ること約一里、叡福寺門前に車を停めて石階を昇る。昇り盡すと二王門がある。二王門を這入ると、はるか正面の石階の上に御廟の門が見える。

塔金堂・聖靈院と立ち並ぶ建物を左に拜し、右方、客殿に案内せられ、少憩の後、身相を整へて御陵墓に参る。石階を昇り、廟門を入れれば、正面には鬱々たる丘陵がある。廟窟の入口に建てられた建物の扉は鎖されて、その上に三體の懸佛がある。その前面には白砂を敷き、石の玉垣を繞らしてある。陵墓監の御心づくしを謝しつつまづ手を淨めて御廟前に進み、掃き清められた砂上に端坐し、猊下のお聲に和して勝鬘經十大受章を拜誦し奉る。

この御廟はお太子様が御薨去の二年前、御自身、地を相し築かせられ、推

古天皇二十九年一月、御母君間人皇后の御遺骸を、大和の箸の御陵から移して、茲に御改葬になつた。その年の二月、御太子様御自身が御かくれになり、御遺命によつて御母君の東側に葬り奉り、時を同じくして御かくれになつた妃膳手皇女をその西側に葬り奉り、都合御三方を一窟中に納め申してあるので、世に「三骨一廟」と申し上げて居る。御母君御改葬の時、若し將來大乘の教國中に流布して遍く衆生を救ふべくば、この木根芽を生じて萬生に榮えんと御誓ひになつて、柩の轅を廟の西側におさしになつたのであるといふ傳説の、かの大乗木は、今は一大老樹となつて御誓ひの空しからぬを物語つてゐる。わたる風にその梢がゆれて、はらはらと露がこぼれてゐる。

墓側一周のお許しを謝しつつ、一同は大乗木のかげからお墓山をめぐらした結界石にそうて、合掌しつつ右繞一匝する。この結界石は二重に

なつてゐる。その内側のは、弘法大師が茲に百日參籠し、御太子様からの示現を得て發光地を證得せられたと傳へられてゐる弘仁の昔、大師の御發願でお作りになつたとのことである、古び壞れてゐるが、一つ一つの石に心を籠めて刻ませ置かれた梵字が、尙鮮かである。爾來數百の星霜に頽破したので、寛保の頃更にその外側に同じ様な石が建て添へられて、今は二重になつてゐるのである。新しい石にも同じやうに梵字を刻み、なほその下に淨土三部經が刻んである。一匝し終つて御廟の東側へ出ると、そこに碑がある。お太子様の御眞源を闡明し給ふ所と傳へられる二十句の偈頌が刻んである。その原文は、御廟窟中の西側の石に刻まれてあるといふ。昔はこの扉の中へも御參りが出來て、その碑を拜し得たとの事であるが、今はそれが出來なくなつたので、その寫しをここに建てられたのである。その文に云はく、

大慈大悲本誓願

この故に方便して西方より

我身は救世觀世音

我身を生育する大悲の母は

眞如眞實本一體

片域の化縁も亦已に盡く

末世の諸衆生を度せんがため

勝地たるこの廟窟にのこし留む

過去七佛法輪の所

一度參詣すれば惡趣を離れ

お太子様がその妃膳手皇女と共に、死して尙母后の御側に侍し給ふ永遠のこの御姿は「一體現三同一身」といふ偈頌の文のやうに、衆生を愍み給

衆生を愍念すること一子の如し

この片洲に誕生して正法を興す

定慧契女は大勢至

西方教主彌陀慈尊

一體三を現ず同一身

西方我が淨土に還歸せん

父母所生の血肉身を

三骨一廟三尊位

大乘相應功德の地

決定して極樂界に往生せん

ふ佛の化儀には相違ないが、更に手近にわが國の礎である家庭の姿として見ても、意味深いことである。母を中心として、夫妻之を擁するは、正しい家の姿である。母の尊い導きに従ひ妻の心づくしを受けつつ、天賦の職に精勵する時、男子には眞の幸福があり。妻としての心づくしが、やがて子をはぐくむ母の愛となり、全家の敬愛が自然にその身に集まる時眞に女性の歡喜がある。この間、母も、夫も、妻も、各々自己を捨て自己を忘れて、互の心づくしに結び結ばるる時、始めて家庭は世間の荒波を渡る堅牢の舟となる。歡喜幸福は之を遙かなる西方淨土に望み求めずとも、脚下に充ちてゐる。世に若し菩薩の願行ありとすれば、まづこの家庭といふ小天地に於て己を捨てるといふ修行から始まるといつてもよいであらう。

併し、菩薩大悲の願行といへば、いかに美しく聞えるが、實際に當つて

見れば、決して美しいことばかりではない。單に不足が不足として數へられるのみでなく心からなる奉仕も却つて誤解の因となるやうな、苦しい試練に堪へ、更にさういふ忍苦の底に見出される正しい心を伸ばし育てることによつて、始めて到り得べき境地である。貪慾・瞋・愚痴の三毒に酔ひしびれて、何一つ取柄のない自分に氣がついて見ると、そのあはれな自分を三界唯一の寶とし、白金にも黄金にもかへがたいものと慈しみ給ひし母の慈愛は、老の將に至らんとするを忘れる位ではいひ盡すことの出来ない恩賚である。又、行届かぬものと初めから己を捨てて嫁し來りしものに、十全を求めるのは求める人の誤である。眞面目な生涯の同行者たるべき妻に對しては、夫は只求める一面だけではなく、さういふ期待に應ずるだけ懇切な指導をする必要があるが、妻としては又、眞に己を空しくして、これに従ふだけの信順が要る。勿論醜い自己をそのままに

して、是れ大悲の願行などと思ひ上るべきではないが、只純真な心持で、夫に導かれつつ奉仕をはげむ姿の後は既に尊い光がある。恩愛に馴れて眼盲ひ、求めることより知らぬ我儘な生活から「げにわれ一人のためなりけり」と深く目覺めて見るならば、母の慈愛はそのままに御佛の慈悲、妻の信順は菩薩の願行と拜することが出来る。この大悲の願行を拜し得た時、死してゆく我が身を忘れても子の幸福を祈り給ひし母の念願を、わが心に秘め、報謝の家常を救世の聖行として無作の發現をなさしむるの、は當然である。この覺醒は、富や地位の力で得られるものではない。人は我が身の試練と感謝すべき目前の好機を、只苦とのみ感じつつ、二六時中自ら苦界を求めて輪廻する。このあはれなる自分を見捨ててもせず、同じ苦しみに我が身をいとはぬ母や妻の姿から、「恒順衆生」と誓ひ給へる菩薩願行を拜し得ないであらうか。

十

五月十六日は夏始めの法要が三經院で行はせられる。四月十六日から七月十五日まで九十日間の修行を夏安居と稱し、略して夏といふ。太陽曆となつてからは五月十六日から八月十五日までに改まり、この間に法華經と勝鬘維摩二經との御講讀を隔年に遊ばすのが慣例である。毎日その法雨に浴し難い人々が御開講の法筵に列つて、せめて一日でもお太子様の御法愛を偲びたいといふので、今日は廣い三經院も立錫の處なきまで善男善女が集つてゐる。

三經院は西室の前端を堂造りとし、その後半を御講場としてある。安置し奉れるお太子様の前で一座の法要がすむと、猊下の御法話がある。丁度今年勝鬘經のお話である。勝鬘夫人が大聖釋尊を拜しその人格

の靈光に照らされて、五障の雲霧を開顯し、自性法身の尊さに目ざめ、信樂し、隨順し、釋尊から豫言された普光如來となるまで、十大受即ち十箇條の誓ひて身を律し、生々世々如説に行ぜんと誓ひ給ふと、天から華がふつて來たといふお話をなさつた。集つた人々の心にも同じやうに天華が雨つて、隨喜讚歎の聲喜踊無量の趣が堂内にあふれ、中には感極まつて嗚咽とゞめえぬ人もある。

わが尊さがわかつたらその自律大成は他の制裁をまつまでもない。自律止犯を窮窟だといふのはわが眞實性に目ざめぬからである。昨年、から御東遊の折々におたちより下さつて、この無比の教を顯示し、わが五障の雲霧を除去し、如來藏佛性を覺知せしめんとし給ひし猊下の御法愛を、今復この法筵で更に攝受正法の喜びをふかめた。一體自分の尊さは人から彼是いふて貰ふから價値があるのではない。身分境遇に應じ

た家常を眞實として楽しむに在る。いはゞ相手の高下で奉仕の價値が定るのでなく、事へるわが心の眞實に依るが如くである。父、父たらずと雖も、子、子たるを希ひ、わが行の足らざるを愧ぢて他の是非を云爲しないのが孝子の眞情である。然るに戲論に養はれた人は常に眼を他に着けて、徒に喧傳せらるるのを貴いやうに思ふ。これは名聞であつて達徳ではない。回光返照すれば各自その境に即して守るべき正法があり、勵むべき道行がある。煩惱具足の身を安逸放肆ならしめるのが惡趣だと氣づいたら、離垢の法水を求め法種を増長せしめるがよい。

今此くの如く同座して常住眞實に歸依し難値の法を喜ぶ心を家苞として、高處は高平に、低處は低平に、自境を眞實ならしめたならば、淨土豈遠からんやである。磯長の御廟前では蒼穹の下大地を床とし、砂を茵として猶歡喜あふるゝを覺えた。貪なきが故に富み、惱なきが故に樂しの聖

訓はげに眞である。只氣づいてもこの心が平常となるだけの精進が足らぬのである。

お太子様が斑鳩の宮の兩側に法隆寺・中宮尼寺をお建てになつたのは、自ら甚深の法智を成就しうるものゝ爲めには法の道場たらしめ、その法智に隨順せんとするものゝ爲めには、示範となる善知識の養成所たらしめ、我が境界にあらずと仰いで如來を推し奉るものゝ爲めには、歸依すべき常住の如來を假示し、わが國中の男女をして善根を修習せしめ、諸の惡趣なく、不滿意の苦なからしめたい御慈愛であつた。參籠七日この御本旨を學び得て、今も尙ありし世のまゝ、斯く傳へられてゐる靈跡に參詣し、お太子様の無比の顯示を仰ぎうる好因縁を喜ばずにはゐられない。見聞するところ皆地上希有の現存、古きが故に類稀であり貴重であるには違ひないが、げに無比なり、不思議なり、世間に等しきものなき所以は、かく

傳へられた建物の内、佛像の前、千古國民を導いてかはらせなき御慈愛と、之に導かるゝ歸依の信とである。謹みて合掌し大聖の矜哀を謝し奉る。

(終)

初めて法隆寺に参詣したのは大正九年秋、佐伯大僧正親下の御親教を辱くするやうになつたのはその翌秋からである。爾來歩を運ぶこと方に五十度。その内昭和二年五月には「是非来いよ」の仰にあまえて一週間、この靈境に参籠し、この靈氣にひたるの喜びを得た。その折の思ひ出を、當時綴つておいたものがこれである。お百度の半分に達した嬉しさに記念として印刷してみた。この靈境にあこがれ給ふ人の御参考にもなればと思ふ。

昭和十三年一月二十二日曉法母庵にて

正 造 謹 誌

昭和十三年二月十一日印刷
 昭和十三年二月十七日發行
 東京市豊島區目白町三丁目
 三五七六番地
 著者兼 發行者 奥 田 正 造
 東京市小石川區大塚窪町三
 印刷者 三 澤 朝 一

行印野關印社立共

終

30
41